

郭公の声に

(昭和三年寮歌)

古河勝夫君 作歌
宮本正治君 作曲

一

郭公の声に迷夢の夜は明けて
紫紺の雲の色も褪めゆき
春芝草に風のそよげば
旭光は見よ東雲の沈黙を破り
自然の精姿紅に揺らぎぬ
讃へなんうら若き日の
朝の神秘よ

二

濃緑に原始の森の茂る候
君影草の花も散り果て
クローバの上に胡蝶舞ひ舞ふ
蒼空の小鳥を追ふか陽炎立ちて
牧場に悠き牛の声聞く
仰臥せる牧童の上に雲は動かず

三

俊巖の秋気何時しか野に充ちて
可憐し虫の音ものを思はず
移ろふ自然の色彩賑はへど
沁々と人の運命の秋も偲ばれ
淋しき哀愁に涙にじみて
蕭々の夕風いとど身には悩し

四

銀月は今雪原の上に照り
エルムの梢淡青く映りて
野末に籠むる夢の狭霧の
奥深く幻想の燈火の明滅を見る
凍らんとする靈氣かすかに
一条の樵路に残る鈴に震へり

五

丈なせる草踏み分けて蝦夷ヶ野に
辿を恵ねし人の姿よ
さ迷ひ暮れて星仰ぎけん
ああそこに原始の影は更に薄れて
老いし楡に嵐荒涼びつ
夕陽は手稻の背淡紅く映せり

六

白樺よポプラ並木よアカシヤよ
春秋三度廻り去りなば
若き生命は疾くに萎え果て
逝にし日の宴遊の宵の
夢も追ひ得じ
此の経営に思想分ちし
寮友よ心の記念永久に謳はん